

## 男性が「少女になる」ための行為としてのオナニーとその困難 押見修造『ぼくは麻理のなか』、『おかえりアリス』論

高橋孝平\*

### 1. はじめに

伊藤公雄らの研究によると、現代は「メンズクライシス（男性危機）<sup>1</sup>」の時代であり、国内外を問わず、男性性に揺らぎが生じている。その背景にあるのは、男性が社会的・文化的・経済的に不安定な状態に置かれていることである<sup>2</sup>。多面的な剥奪感情に苛まれた結果、男性は自らの「男性性」に過度に固執したり、女性に対して根拠のない差別感情を抱いたり、時に凶悪犯罪を生み出してしまふという状況も出来している<sup>3</sup>。こうした傾向は、欧米圏では、トクシク・マスキュリニティという用語で名指されている<sup>4</sup>。

その一方、別の傾向も確認される。男性が男性性に対する執着から抜け出そうとして「男をやめたい」や「少女になりたい」と考える方向である。実際に、バーチャル空間で美少女を演じる男性である「バーチャル美少女受肉（バ美肉）おじさん<sup>5</sup>」が台頭してきているように、もはやマジョリティの男性にとっても、「男をやめたい」や「少女になりたい」といった願望は、実現不可能なものではなくなりつつある。

男性が抱くこのような欲望を真正面から描き続けてきたのが、押見修造（1981年～現在）という漫画家である。はじめに押見修造の作風を簡潔に述べるならば、自分にとっての切実な問題を自伝のごとく漫画の主題にし、描きながら自己変革を行う漫画家といえる。

---

\* 早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程修了

電子メール：kohei4636@suou.waseda.jp

<sup>1</sup> 伊藤公雄・多賀太・大東貢生・大山治彦『男性危機？ — 国際社会の男性政策に学ぶ』晃洋書房、2022年、4頁

<sup>2</sup> 同書、43-45頁

<sup>3</sup> 同書、3-4頁

<sup>4</sup> 同書、22頁

<sup>5</sup> バーチャル空間上で美少女のアバターを用いて活動することを「バーチャル美少女受肉（バ美肉）」と呼ぶが、特に「バ美肉」した男性のことを特に「バ美肉おじさん」と呼ぶ。

押見はインタビューで自らの切実な問題をテーマにし、登場人物にシンクロしながら漫画を描いているのだと語っているが<sup>6</sup>、実際に、押見の作品で主人公となる男性キャラクターの多くは、押見自身をモチーフにしたような設定になっており<sup>7</sup>、押見と同じような悩みを抱えている<sup>8</sup>。また女性キャラクターであっても、押見はそこに自らの悩みを仮託するなどして<sup>9</sup>、自分の一側面として描くのだという<sup>10</sup>。そして作中の出来事についても、押見のトラウマともいえるべき実体験をモチーフにしたものが何度も登場する<sup>11</sup>。このトラウマも含めた当時の出来事やその時の感情を再現しながら漫画を描くという押見の作風は、相応の痛みを伴う。そのため押見は漫画を描いていて体調が悪化することもあるほどだそうだが、それは辛いというよりは、むしろ楽しい経験なのだという。

---

<sup>6</sup> 若林理央 (2021) 「「血の轍」押見修造さんインタビュー 思春期の母子関係の悩み、ぜんぶ出す覚悟で」好書好日、<https://book.asahi.com/article/14487978> (2024年2月29日閲覧)。

<sup>7</sup> 特に顕著なのが『悪の華』（『別冊少年マガジン』（講談社）、2009年10月号～2014年6月号）と『血の轍』（『ビッグコミックスペリオール』（小学館）、2017年第6号～2023年第19号）の2作品である。どちらも押見の地元を舞台としており、『血の轍』に至っては、主人公の長部静一は押見と生年月日が同じという徹底ぶりである。

<sup>8</sup> 多くの場合、思春期の少年が主人公であるが、彼らは押見自身が悩んだという吃音症や、思春期の性にまつわるコンプレックスを抱えている。また主人公が大人であっても、例えば、押見が結婚し娘が生まれた頃に連載していた『漂流ネットカフェ』（『漫画アクション』（双葉社）、2008年第18号～2011年第8号）では、主人公である土岐耕一は、もうすぐ娘が生まれるというのに、初恋の少女のことが忘れられないという悩みを抱えている。実際に、押見はこの作品について、自身の中学生の頃の初恋とそのトラウマをベースにしていると語っている（押見修造『漂流ネットカフェ』第7巻、双葉社、2011年、196頁）。

<sup>9</sup> 『志乃ちゃんは自分の名前が言えない』（『ぼこぼこ』（太田出版）2011年12月～2012年10月）の主人公である大島志乃は、常にどもりがちであり、そのせいもあってか他人とうまくコミュニケーションを取ることができない。また『スイートプールサイド』（『ヤングマガジン』（講談社）2004年、第20号～第26号）は、体毛が生えないことに悩む中学生太田年彦と、反対に毛深いことを気にしている後藤綾子との奇妙な交流が描かれるが、押見は体毛が濃くて嫌だったという自身の悩みを後藤に託しているという（藤本エリ（2014）「漫画家・押見修造インタビュー「『スイートプールサイド』も『悪の華』も僕にとっては真っ当な青春」」、ガジェット通信、<https://getnews.jp/archives/598227>（2024年3月1日閲覧））。

<sup>10</sup> マガポケベース (2023) 「【第110回新人漫画賞締め切り直前特別企画】～漫画家を目指すキミに贈る～漫画家への花道 『おかえりアリス』押見修造先生が新人漫画家の悩みを解決!」、マガポケ、[https://pocket.shonenmagazine.com/article/entry/hanamiti\\_20230329](https://pocket.shonenmagazine.com/article/entry/hanamiti_20230329) (2024年2月29日閲覧)。

<sup>11</sup> 代表的なのが、中学生のときに母親に初恋の少女との関係を引き裂かれた経験であり、押見は今でもこのトラウマが尾を引いているという（金澤ひかり（2019）「漫画家の押見修造さん強みになった「引きずっている思春期」」、withnews、<https://withnews.jp/article/f0190813000qq0000000000000000W07n10101qq000019545A>（2024年3月1日閲覧））。そして、『悪の華』や『血の轍』には、この時の状況をモチーフにしたと思われるシーンが何度も登場する。

でも楽しいですよ。ルンルン気分で描いているわけじゃないですけど(笑)。体に変調をきたしたり、どもったりしていますけど、今まで開けていなかったフタが開いていく感覚は、楽しいといえれば楽しいです。もしかしたら、今まで描いてきたマンガのなかで、一番楽しいかもしれない。マンガという形で吐きだせているから、なんとかなっているのかもしれませんが<sup>12</sup>。

このように、自らが持つトラウマを漫画にして吐き出すという方法で、押見は痛みを伴いながら私小説のような物語を紡いでいくのだ。

それでは、押見にとっての切実な問題とは一体何か。それは性に関する悩みであり、そのうちのひとつに「男性であることから抜け出して少女になりたい」という少女化願望を挙げることができる。押見はかつて自分には「女の子になりたい」という願望があることを打ち明けているが<sup>13</sup>、それを証明するように、押見の作品には随所に男性が少女と融合するようなシーンが見られ<sup>14</sup>、そうでなくても、作中で唐突に男性が少女によって無理やり女装させられるシーンが数多く登場する<sup>15</sup>。これらに共通して見られるのは、少女に導かれて、少女が見ている世界をわずかでいいから体感したいという押見の切実な願いである。

それではなぜ押見は「女の子になりたい」のか。押見は自身が抱く少女化願望の理由を、以下のように述べる。

男の心のまま/女の身体になった自分の裸を見ても/それはあくまで“男の性欲の目線”でしかないので/どンドン女の子から遠ざかってゆくだけなのです/そうじゃないんだ.../僕は...僕は“心の中から全て女の子”な存在になりたいんだ.../女の子として生まれ.../女の子として育てられ.../女の子としての人生を歩んできた/本物の女の子に.../それはなぜか?と言いますと.../僕

---

<sup>12</sup> 加山竜司 (2018) 「【インタビュー】押見修造『血の轍』 「これを描いたら引退してもいい」!? 読者に衝撃をあたえた、あのシーンの秘話も!」、このマンガがすごい! WEB、1 頁、<https://konomanga.jp/interview/138104-2/> (2024年2月29日閲覧)。

<sup>13</sup> 押見修造 (2012) 『ぼくは麻理のなか』第1巻、双葉社、192頁

<sup>14</sup> 『ユウタイノヴァ』(『ヤングマガジン』(講談社)、2007年第28号~2008年第19号) や『アバンギャルド夢子』(『別冊ヤングマガジン』(講談社)、2003年第44号~49号) では、セックスという行為が男女の身体が溶け合うものとして描かれる。

<sup>15</sup> 例えば、『デビルエクスタシー』(『ヤングマガジン』(講談社)、2005年、第31号~2006年、第18号)、『悪の華』、『日下部さん』(『webアクション』2020年3月25日) など。

にとってつまり女の子とは/「世界の半分」なのです/男としての僕は男としてしか世界を見られない/女として世界を見ることは絶対できない/その届かない世界の半分に踏み込みたいという願望なのです<sup>16</sup>

このように、押見の「女の子になりたい」という願いは、単に外見だけ少女になれば達成されるものなのではなく、少女として生きることでも身も心も少女になりたいというもはや実現不可能な願いなのである。

この切なる願いを掘り下げた押見の作品として、『ぼくは麻理のなか』（『漫画アクション』（双葉社）、2012年3月20日号～2016年9月20日号）と『おかえりアリス』（『別冊少年マガジン』（講談社）、2020年5月号～2023年9月号）がある。『ぼくは麻理のなか』は、男性が朝目覚めると気にかけていた少女の身体に移っていたというストーリーであり、『おかえりアリス』は、「男を降りる」という台詞がキーワードになっており、男性であることからどうすれば抜け出せるのか登場人物が苦しみながら模索していく過程が描かれる。とりわけ興味深いのは、どちらもオナニーというセンシティブなテーマを扱っている点である。

本論文では、作中に描かれるオナニーの表象から、『ぼくは麻理のなか』と『おかえりアリス』の2作を分析していきたい。そのためにまず、先行研究と押見の発言から少女化願望とオナニーの関係を明らかにする。次に『ぼくは麻理のなか』におけるオナニー表象を分析し、押見がどのようにオナニーという行為を描いていたのかを明らかにし、その可能性と限界を示す。最後に、『おかえりアリス』において、押見がどのようにその限界を乗り越えようとしたのかを分析し、最終的に押見がどのような男性のあり方を指し示したのかを明らかにする。

## 2. 男性の少女化願望とオナニーの関係

### 2.1. 男性が抱く少女化願望

オナニーについて考える前に、男性が抱く少女化願望についての言説を整理する。はじめに、少女をめぐる男性のセクシュアリティから考えていきたい。斎藤環は少女を欲望する男性オタクのセクシュアリティとは、美少女キャラクタ

---

<sup>16</sup> 押見修造（2012）、193-194頁

一を自分のものにしたいという「所有」であり、彼らはグッズの収集や二次創作をするといった形で虚構を作り出すことによって、美少女キャラクターの所有を試みるのだという<sup>17</sup>。

一方で永山薫は、男性オタクが持つ美少女を「所有」したいという願望の裏には、美少女になりたいという同一化の願望が潜んでいるのではないかと指摘する。永山はポルノコミックのうち、特に年齢の若い美少女キャラクターが登場する「ロリコン漫画」を読む男性について、非力で支配しやすい少女を「所有」したいという願望の裏側には、その少女になりたいという同一化の欲望が隠れており、それらは両立するものであると指摘する<sup>18</sup>。

さらに、この少女化願望は男性オタクの中で一般化しつつあるという指摘もある。樋口康一郎は、1990年以降に女性同士の友愛関係を描く「百合」がジャンルとして定着したことと、2000年代以降に「男の娘」と呼ばれる一見少女に見える可愛い少年がオタク文化の中で人気を博したことを例に、男性オタクの欲望は、異性愛や男性性から逃れるために「所有」からむしろ少女になりたいという「憧憬」へと変容していると述べた<sup>19</sup>。

これについて、視線という観点からの議論もある。ササキバラ・ゴウによると、美少女キャラクターに対する男性読者は、一方的に女性を値踏みする「視線としての私」という役割が与えられ、美少女を「見られずに見る」という特権的な立場を結ぶのだという<sup>20</sup>。それに対して熊田一雄は、「百合」を愛好する男性が少女化願望を口にすることを例に、男性が作中の女性に同一化を果たすことで、特権的な立場を放棄し、見ると同時に見られるという双方向的な立場を志向するようになる者もいるとササキバラに反論している<sup>21</sup>。

いずれにせよ、これらの議論を通して言えることは、少女に欲望する男性のセクシュアリティとは基本的に、一方的に女性を値踏みするような性的な主体

---

<sup>17</sup> 斎藤環 (2003) 「「萌え」の象徴的身分」、東浩紀編『網状言論F改 — ポストモダン・オタク・セクシュアリティ』青土社、59-81頁、65-66頁。

<sup>18</sup> 永山薫 (2006) 『エロマンガ・スタディーズ — 「快樂装置」としての漫画入門』イースト・プレス、106-108頁

<sup>19</sup> 樋口康一郎 (2015) 「「女の子になりたい男」の近代 — 異性愛制度のなかの〈男の娘〉表象」『現代思想』第47巻、第13号、青土社、85-92頁、87頁。

<sup>20</sup> ササキバラ・ゴウ (2004) 『〈美少女〉の現代史 — 「萌え」とキャラクター』講談社、171-176頁

<sup>21</sup> 熊田一雄 (2005) 『男らしさという病? — ポップカルチャーの新・男性学』風媒社、80-84頁

でありたいというものであるが、その裏側にはむしろそのような存在であることから逃避したいという願望が潜んでいるということである。つまり男性が抱く少女化願望は、己に与えられた男性性からの逃避であり、一方的に女性を値踏みする性的な主体としての男性という存在からの脱出願望だといえる。

## 2.2. 少女になるためのオナニー

しかしながら、「少女になりたい」という男性の欲望は、単に男性という存在から抜け出したいという願望にとどまるものではない。むしろ、積極的に少女になろうとするものである。

前述の永山は、特にポルノコミック、つまり美少女キャラクターの性行為が描かれる漫画の作者と読者は、それを描くことや読むことによって、少女の身体に入ろうとしているのではないかと示唆する<sup>22</sup>。さらに永山はポルノコミックのうちの「ロリコン漫画」について、非力で支配しやすい少女に対する「所有」の願望の裏側には、「可愛い少女キャラになりたい／愛されたい／抱き締められたい／犯されたい／虐待されたい<sup>23</sup>」という同一化の欲望が隠れていると指摘する<sup>24</sup>。

ここで、ポルノコミックを嗜むという状況において男性の「少女化」願望が発現していることに注目したい。つまり、男性の「少女化」願望はオナニーをするという状況で立ち現れるのだ。実際に、オナニーのときに少女になることを夢想する男性は少なからず存在する。

これについて会田誠は、男性にとって（異性愛の）セックスとは「男になることを自らに強要する行為」であり、反対にオナニーは「男らしさ」から解き放たれた「女」になる行為なのだという<sup>25</sup>。そして会田は以下のように続ける。

逆に「能動が義務」という自らの運命を嘆き、自分に男性性を押しつけた天を呪い、股間にぶら下がったチンポコを持って余したまま虚しく立ちすくんでいる男性は、少なからず存在しているはずだ。——ここまで書けば

<sup>22</sup> 永山薫（2003）「セクシュアリティの変容」、東浩紀編『網状言論 F 改』青土社、39-57 頁、52 頁。

<sup>23</sup> 永山（2006）、107 頁

<sup>24</sup> 同書、107 頁

<sup>25</sup> 会田誠（2022）『性と芸術』幻冬社、153 頁

多くの読者はお察しかと思いますが、思春期から青年期にかけての僕は、まさにそんな哀れな人間のオスの典型的な一匹でした。〔中略〕というわけで、もはやオナニーしかないのです。社会の「男になれ」という隠然たる要求をボイコットしたい「男未満の者たち」は、深夜自室に籠り、オナニーで「女になる」しかないのです<sup>26</sup>。

セックスという性的な行為の際に、「男らしさ」つまり男性は「能動が義務」であることが如実に意識される。だからこそ同じく性的な行為であるオナニーの際には、反対に「女になる」というのだ。

赤川学もまた、オナニーはセックスとは別種のものであるといい、オナニーはむしろ日常と切り離された私的で想像的なものであるという。

受け手はポルノグラフィを受容することによって、日常的な現実性とは異質のリアリティを獲得している。というのもポルノグラフィそのものは現実的な他者との性的実践ではなく、私的な秘密の空間において架空の人物に同一化したり対象化することによって性的興奮を引き出すからだ。ポルノグラフィを通して確認されるのは、「性行為を行う」欲望ではなく、「性行為を行う」のを「みる・よむ・しる」欲望である。だからそのリアリティは、畢竟、私密的・幻想的・自慰的・自己完結的で想像的なものである<sup>27</sup>。

赤川の指摘に従うのであれば、オナニーの際に少女になることを夢想することはまさに日常と切り離された「私密的・幻想的・自慰的・自己完結的で想像的な」同一化であり、当然の帰結とも言える。もちろん男性がみな会田のような考え方をしているわけではないが、性別が特に意識される性的な行為において、オナニーという妄想の世界で、現実では不可能な女性になることを夢想することには一定以上の説得力がある。

しかしこれではまだ少女になることを夢想する理由にはなっていない。前述

---

<sup>26</sup> 同書、155-156 頁

<sup>27</sup> 赤川学（1996）『性への自由／性からの自由 — ポルノグラフィの歴史社会学』青弓社、150 頁

の永山は少女の身体の方が気持ち良さそうだからだと示唆するが<sup>28</sup>、これについて議論を発展させたのが森岡である。森岡には、少女は快感を感じる身体を有しているという幻想があり、間違っって性的な快感を感じない男の身体に分岐してしまったという後悔の念があるという。

私の意識の底には、ひとつの思いが沈殿している。私はあの思春期の分岐点において、間違っった方向へと舵を取ってしまったのではないかという思いである。本来ならば「女の体」のほうに向かって開花しているはずだったのに、何かの間違いで、私は「男の体」のほうに舵を取ってしまった、いや、自分の意志とは無関係に無理やり舵を取らせてしまったのではないかという思いである<sup>29</sup>。

少女になりたいという願望は、単に男性性からの解放を意味するだけではなく、少女の身体になることで、性的な快感を味わうことができる本来の姿に立ち返ることでもあるのだ。

押見もまた、自身が少女に憧れる理由を2つ挙げている。1つ目は、「男から、暴力から遠く離れていたいという願い<sup>30</sup>」である。これは男性性からの逃避であり、押見にとっては学校や社会に馴染めない疎外感や、吃音に由来する男性としての劣等感から逃げ出すために、「自分が本当にあるべき姿、精神の結晶<sup>31</sup>」である少女を夢想したのだという<sup>32</sup>。ここで押見は森岡と同様に、自分の本来の姿として少女を規定している。2つ目は、少女が「向こう側」を知っているのではないかと考えたことである。押見は「向こう側」を、すべての境界がなくなった快樂の果てとも呼び、少女になることによってそこに至れると考えた<sup>33</sup>。そして「向こう側」に至ると、男の「偽物の、しょぼい残りカスでしかないような快樂<sup>34</sup>」とは全く違う快樂を味わえるとした。

つまり押見にとってオナニーとは、妄想の中で自分の本来の姿である少女に

---

<sup>28</sup> 永山（2003）、52頁

<sup>29</sup> 森岡正博（2013）『決定版 感じない男』筑摩書房、148頁

<sup>30</sup> 押見修造（2022a）『おかえりアリス』第5巻、講談社、184頁

<sup>31</sup> 同書、184頁

<sup>32</sup> 同書、184頁

<sup>33</sup> 押見修造（2023a）『おかえりアリス』第6巻、講談社、188頁

<sup>34</sup> 同書、188頁



戻ることによって、男性であったら到達することのできない「向こう側」に至ろうとする行為なのだ。だからこそオナニーという「私密的・幻想的・自慰的・自己完結的で想像的な」性的快感を味わう行為によって少女に至ろうとするのだ。

### 2.3. 男に引き戻されるオナニー

反対に、男性がするオナニーには逆方向の力、つまり男に引き戻される力も働く。赤川はアダルトビデオやポルノ漫画の性描写において、男性の身体が不可視化され、女性の快樂や欲望だけがしきりに強調されることを例に挙げ<sup>35</sup>、以下のように述べる。

女性のセクシュアリティの真理をかいまみたいという受け手の切ない願いは、つねにすでに挫折を強いられる。受け手はけっして女性の視点をとることができず、女性に同一化することが不可能であるがゆえに、自己を、女性に同一化不能な他者、すなわち男性として再認するのだ。女性の快樂を問いかけることによって自己を男性として再認させること、これがポルノグラフィの基本的戦略である<sup>36</sup>。

このように、男性はポルノグラフィを見ることで自らが女性ではないことを強く意識してしまうのだ。実際に、女性の身体の快樂は視聴者の男性にとっては謎であり、男性がどれだけ神経症的に女性がオーガズムを感じているかどうかを確認したとしても、それは失敗に終わる<sup>37</sup>。

押見にとってもオナニーとは、汚い男性の身体から解き放たれる手段だったという。しかしその妄想は射精することで閉じ、現実へと引き戻されるという。押見は身体を舟にたとえ、以下のように述べる。

妄想の中で僕は自分と少女の境目を溶かし、少女になり、人形になり、男という舟を降りていた。オナニーしている自分を忘れながらオナニーした。でも射精をした瞬間、僕は現実に引き戻され、元の逃げられない男という

---

<sup>35</sup> 赤川、前掲書、148-149 頁

<sup>36</sup> 同書、153 頁

<sup>37</sup> 同書、151-153 頁

舟に閉じ込められているのだった<sup>38</sup>。

このように押見にとってオナニーという行為は、少女になることを夢想し男性の身体から一時的に解き放たれる手段である一方で、男性であることから逃れられないことを確認する場でもあったのだ。

つまり男性は一般に女性のポルノを鑑賞することによって、自らが女性と他者化された男性であることを再確認するのだ。オナニーとは少女になることを夢想し男性の身体から解き放たれる手段である一方で、少女との断絶を突きつけられる機会でもあるのだ。特に押見にとって射精という行為は、「向こう側」に至ろうとする瞬間、男の身体へと引き戻される行為といえるだろう。

### 3. 少女になることの不可能性 — 『ぼくは麻理のなか』論

#### 3.1. 『ぼくは麻理のなか』とは

前章では、オナニーという行為は、男性が妄想の中で理想的な感じる身体を持つ少女になろうとするものの、失敗し、かえって男性という身体に縛り付けられるという行為であることを示した。本章では『ぼくは麻理のなか』において、オナニーという行為がどのように描写されているのかを分析する。

そもそも『ぼくは麻理のなか』とは、押見の「少女になりたい」という願望を主題とした作品である。実際に、本作は押見が持つ少女になりたいという願望を作品にしたものだと明かしている。

もともと自分に“心の中から全て女の子になりたい！”という願望があったので、男が女の子になれる話を描けないかなあと思ったら、わりとスルスルッとネームができたんです<sup>39</sup>。

そして押見の発言の通り、漫画のストーリー展開は、男性の主人公が突然少女になってしまうというものである。引きこもりの大学生小森功は、ある朝目覚める

---

<sup>38</sup> 押見 (2022a) 、184 頁

<sup>39</sup> 高橋祐美 (2016) 「INTERVIEW 『悪の華』、『ぼくは麻理のなか』、『ハピネス』漫画家押見修造」『Trickster Age (ロマンアルバム)』第 32 号、徳間書店、117-121 頁、117 頁。

と、いつも寄るコンビニで遭遇する憧れの少女吉崎麻理の体に移っていたというまさに「少女になりたい」という欲望を体現した物語になっている。

物語は麻理になってしまった小森が、麻理の中身が変わっていることを察知した柿口依という少女とともに、どこかに消えてしまった麻理の人格を探し、入れ替わりの真相を明かすという流れをとる。しかし、物語の終盤では、この入れ替わり自体が麻理の狂言であったことが明かされる。つまり、憧れの少女である麻理の身体に憑依してしまった小森は実際のところ存在せず、麻理が自分のことを「麻理になってしまった小森」だと思い込んでいただけであった。なぜかという、麻理は小森として振舞うことによって、母親や周囲の人間関係といった、自分を縛り付けるものに抵抗していたのだ。だからこそ、『ぼくは麻理のなか』は単なる「少女になりたい」男性の物語なのではなく、むしろ少女の成長物語として解釈することができるのだ。

この物語のギミックゆえに、『ぼくは麻理のなか』は二重の読みが可能になる。ひとつは少女に移った男性の物語として、もうひとつは、少女の成長物語としての読み方である。それゆえ、第30話から第32話にかけて描写される、麻理の鏡を使ったオナニーシーンには、ふたつの読み方が可能である。ひとつは、男性が少女と一体化するためのオナニーであり、もうひとつは少女が個としての解放を目指すためのオナニーである。

なお、ここで『ぼくは麻理のなか』で語り手の視点となる「自分のことを小森だと思い込んでいる麻理」を、便宜上小森（麻理）と表記し、小森（本人）と区別する。

### 3.2. 少女と一体化するためのオナニー

本節ではまず、ストーリーの流れに沿って理解し、当該のシーンを男性である小森（麻理）が、少女である麻理の中に溶けて一体化するためのオナニーとして解釈する。

小森（麻理）がオナニーに至るまでの顛末に触れておきたい。第25話で麻理が以前から小森（本人）を監視していたことを知った小森（麻理）は、自分が麻理に見られる存在であったことに感激し、「ぼくは... ぼくを見る！<sup>40</sup>」と宣言する。そして食卓で麻理をよそに夫婦喧嘩にいそしむ母親に対して「“私”を見

---

<sup>40</sup> 押見修造（2014a）『ぼくは麻理のなか』第3巻、双葉社、166頁

ろよ...！<sup>41</sup>」と啖呵を切り、麻理と同じように同調するだけだった学校の人間関係を「くそくらえ<sup>42</sup>」と吐き捨てる（第 29 話～第 30 話）。ここで「見る」という行為は自分の欲望に気づくための行為であり、「見ろよ」という発言は、相手を自分にとって都合の良い存在に仕立て上げることへの警鐘であった。

第 30 話では、小森（麻理）は部屋に戻ると鏡に映る麻理に向かって、自分の行いが正しかったのかを問いかけ、そのまま鏡の中の麻理に手を触れ、そっと口付ける。そして第 31 話では、鏡の前で服を脱ぎ、裸となった身体を直視する。視線を逸らそうとする小森（麻理）であったが、ぬいぐるみを手に取って鏡に向け、「ぼくは ぼくを見る...<sup>43</sup>」と呟く。ここで、オナニーは自分を見つめ、欲望を直視するための行為として描かれる。そして小森（麻理）はオナニーをすることによって麻理に対する一体化願望を自覚する

麻理/ぼくはきみだ/きみは...ぼくだ/わかるよ/きみのをかんじるよ/ああ/ぼくは.../そうかぼくは.../きみになりたかったんだ/ああっ/いくっ/きみの中に消えてなくなれ/ぼくなんか溶けてしまえ<sup>44</sup>

ここで小森（麻理）は、麻理になりたいという欲望、つまり麻理と一体化し、そのまま消えて無くなりたいという欲望に気がつく。「ぼくを見る」と宣言した小森が自覚した欲望とは、身も心も少女になりたいという欲望であったのだ。

さらに、小森（麻理）のオナニーは、漫画の演出として、麻理と小森のセックスのように描かれることに注目したい。イメージ上の小森は黒い影のような身体になり、表情はなく視線だけの存在となって麻理をじっとみつめ、そして犯すのだ。

この視線だけの存在になることは、ササキバラがいうような「視線としての私」、つまり女性をキャラクターに仕立て上げ、一方的に見るだけの関係を結ぶ男性性の発露である。小森（麻理）は「視線だけの私」という男性性を保持したまま、少女を犯すという形で少女の身体の快感を我が物にしようとする。森岡によると、少女を痛めつけたいという男性の女性嫌悪は、本来自分なるはずだっ

<sup>41</sup> 押見修造（2014b）『ぼくは麻理のなか』第 4 巻、双葉社、66 頁

<sup>42</sup> 同書、73 頁

<sup>43</sup> 同書、99 頁

<sup>44</sup> 同書、112-117 頁

た「感じる女」に対する復讐だというのが<sup>45</sup>、麻理への同一化願望を口にしながら力尽くで麻理を犯すという表現で描かれるこのオナニーは、まさに女性嫌悪という形で表出されるような男性の少女化願望を体現しているといえる。

### 3.3. 個としての解放を目指すためのオナニー

その一方で、別の読み方もある。それは従順な娘である麻理が、個としての解放を目論むためのオナニーである。

このことを理解するためには、作中で明らかにされた麻理の生い立ちを知っておく必要がある。物語の後半で、麻理は忘れていた記憶を思い出す。それは、麻理はもともと「史子（ふみこ）」という祖母が命名した名前だったが、祖母が亡くなった後、母親によって「麻理」という名前に変えさせられたという記憶である。だからこそ作中において、「麻理」という名前は、麻理が母親に従順な娘であることを表象している。押見も『ぼくは麻理のなか』において名前はキーアイテムになっているという。

あとは“名前”はわりとキーアイテムになってしまして、みんな名前にとらわれていると言いますか.....。〔中略〕名前を知るとか、どういう呼び方なのかとか、それぞれが名前にこだわることで、表面上の自分の輪郭—自分で自分はこうである、と決めているということ象徴できたら、と思いました<sup>46</sup>

実際に、作中において「麻理」という名前は、母親や友人から責められるように繰り返し呼ばれる。例えば、第77話で全ての記憶を思い出したときの麻理の回想では、「麻理」であることを強制する周囲の視線が、「麻理」と呼ぶ声とともに象徴的に描かれ、その視線を浴び続けた麻理の鏡に映る姿は、落書きのように崩れている。このとき、麻理の名前を呼ぶ母親の目はグロテスクなまでに大きく強調されている。

このように、周囲の人間、特に母親から従順な娘「麻理」であることを強制する視線を浴び続け自分を見失った麻理は、自分とは反対に、誰にも憚れることも

---

<sup>45</sup> 森岡、前掲書、59-72 頁

<sup>46</sup> 高橋、前掲書、118 頁

なく毎日オナニーに耽る小森（本人）のことを羨ましく思うようになる。だからこそ前述の小森（麻理）のオナニーは、実際のところ、周囲の人間や母親から「麻理」として期待されること徹底的に放棄し、新たに自分の図像を結び直すという麻理の反抗の手段だったのだ。つまり麻理が「麻理」であることをやめる手段こそがオナニーなのである。「ぼくは... ぼくを見る！」という台詞は、小森（麻理）が「少女化」の欲望を自覚する言葉なのではなく、麻理が自分の姿を見つめ直し、自身の姿を画定するための言葉であったのだ。

だからこそ麻理のオナニーは、麻理としての自分の図像を結び直す行為なのだ。それはオナニーをするまで、麻理は自分の姿をまともに見ることができなかったことから明らかである。物語の序盤に小森（麻理）は、麻理となった自身の身体を直視できないという問題も抱えており、着替えやトイレの時は目を瞑り、お風呂に至っては目隠しをして入る有様であった。小森（麻理）が麻理を神聖視していることは、以下の台詞に集約されている。

麻理さんは特別なんだ 唯一の.....僕の生活の中でたったひとつの輝き...  
だからその輝きを自分の汚い欲望で汚すなんて...できるわけないよ<sup>47</sup>

これは小森（麻理）が麻理を理想の少女として崇めているからこそ、その姿を直視できないことを象徴する台詞である。しかし、理想化している少女の身体を見ることができないという小森（麻理）としての悩みは、結局のところ自らの像を結ぶことを拒絶する麻理という少女の悩みであったのだ。

実際に、第 18 話から第 19 話にかけて、小森（麻理）は生理の苦しみを体感するという過程を経ることで、麻理の身体に対する理想を捨て、今まで直視できなかった麻理の乳房を見ても何も感じなくなる。しかしこれは麻理が自分の身体を（再）発見していく過程として読み替えられる。同じように、オナニーをすることは、周囲から期待される「麻理」像から自分を取り戻し、自己を結び直す再生の手段だったのだ。

### 3.4. 男女の彼岸へと至るためのオナニー

今まで見てきたように麻理のオナニーは、男性である小森（麻理）として少

---

<sup>47</sup> 押見修造（2013）『ぼくは麻理のなか』第2巻、双葉社、117頁

女との一体化を目指すものでもあれば、少女である麻理として周囲（特に母親）から期待される「麻理」像を破壊し、個として解放されるためのものでもあった。しかし『ぼくは麻理のなか』にはもう一つのオナニーシーンがある。それは小森（本人）のオナニーであり、今までと違って男性の身体を通したオナニーである。この男性である小森（本人）のオナニーは「少女化」になりうるのかを検討したい。

小森のオナニーは、しばしばみっともなさが強調される。小森には「足をピーン<sup>48</sup>」とする悪癖があり、小森（麻理）はともに入替わりの真実を追う柿口依に、「吉崎さんの眼球で…見るな！<sup>49</sup>」と咄嗟に目を覆われるほど、醜悪で人に見せられないものとして描かれる。そのみっともなさが顕著に表れているのが、第39話である。小森（本人）は薄着で自室に来訪してきた小森（麻理）のことを想ってオナニーをするが、それを小森（麻理）に見つかってしまう。

ここで小森は体毛が生えた足を「ピーン」とさせ、みっともない表情を浮かべている。第40話では、小森（麻理）は小森（本人）にオナニーを続行するように告げ、その姿を凝視し、そのまま手で小森（本人）のペニスを愛撫して射精へと誘う。このとき小森（麻理）の手にベトベトとしたものが纏わりつくという、前述の小森（麻理）のオナニーと同じシークエンスが挿入される<sup>50</sup>。それでは、このもう一つのオナニーは一体何を表すのだろうか。

これを麻理の視点から考えてみたい。前述のように麻理は誰にも縛られることもなく自由にオナニーをする小森（本人）に憧れており、その気持ちが麻理を小森（麻理）にさせたのだった。だからこそ麻理にとってのオナニーは、個としての独立を可能にする理想的な力が宿っていた。しかしながらオナニーの実態とは、小森（本人）のように汚く、みっともないものであり、ここで麻理が小森（本人）のオナニーを見ることは、彼に対して抱いていた憧れを解きほぐす行為として描かれる。そして麻理がオナニーする小森（本人）の性器を愛撫することは、みっともない存在である小森（本人）と麻理が一体化し、ともに汚さを抱える存在として共犯関係を結ぶことである。それは麻理が小森（麻理）として小森（本人）を愛撫した理由を言った以下の台詞に集約される。

---

<sup>48</sup> 押見（2012）、184頁

<sup>49</sup> 同書、185頁

<sup>50</sup> 押見（2014b）、121頁と押見修造（2015a）『ぼくは麻理のなか』第5巻、双葉社、106頁

最低の僕が...おまえがチンコ放り出してオナニーしてたからだよ!!/だからもっと...とことん最低になってやろうと思ったからだよ!!<sup>51</sup>

ペニスを愛撫することは一緒に「最低」になる行為であり、精液で汚れた手は身体までも汚くなったことを意味する。

そもそも『ぼくは麻理のなか』は、異性に対する憧れは男性が抱くだけのものではなく、女性もまた持ち合わせているというストーリーだった。押見は以下のように述べる。

あの時は、女性を理想化して偶像化していたら、偶像化していた相手に自分も偶像化されていて、結局は相対的な関係でしかなかったという話を描いたんですけど<sup>52</sup>

押見の作品は男性が異性を理想化し、その理想化した異性になりたいと願ってしまうが、結局その理想を捨てることによって男女の境界線を溶かすという物語を描いてきた。しかし『ぼくは麻理のなか』では、その異性を理想化し、その理想化した異性になりたいと願う願望にすら性別の境界がなくなるのだ。男性の身体が汚く、女性の身体は美しいという単純な二項対立に由来する少女化願望は否定され、男女という性別やその身体はともに清濁を併せ持ったものとなる。

それを象徴するのが、第 49 話から第 50 話へと続くエピソードである。小森（麻理）が小森（本人）のペニスを愛撫したことを知った依は、小森（本人）を張り倒し、彼のペニスを潰そうとする。それを引き留めようと手を伸ばす小森（麻理）であったが、依は「いやあっ 汚いっ<sup>53</sup>」と咄嗟に拒絶する。その手は小森（本人）のペニスを触った手であるからだ。これに対して麻理は次のセリフを吐き、依にキスをする。

---

<sup>51</sup> 押見修造（2015b）『ぼくは麻理のなか』第 6 巻、双葉社、15 頁

<sup>52</sup> 季刊エス編集部（2024）「漫画『血の轍』『おかえりアリス』押見修造」『季刊エス』第 84 号、パイインターナショナル、58-65 頁、63 頁。

<sup>53</sup> 押見（2015b）、113 頁



汚くないよ/...きれいでもない/みんな/僕も...依さんも/...麻理さんも<sup>54</sup>

ここで男性であることも女性であることも全て、「汚くもきれいでもない」という次元で相対化される。自分にとっては汚いものも別の人にとっては崇高なものとして映るような、いわば汚さもきれいさも混濁した男女の彼岸へと至るのだ。

男女の彼岸へとたどり着くのは作中の登場人物だけでなく、押見自身もそうである。最終巻のあとがきでは、そのことが端的に言い表されている。

1巻のあとがきで、僕は「女になりたい」と書きました。でも、もう女になりたいことはありません。この漫画を描いて、僕は自分の中に女を見つけました。女の中に男を、みにくさの中にキレイを、幻の中に現実を見つけました。あなたの中の境目が、ひとつでも無くなれば嬉しいです<sup>55</sup>。

このように、『ぼくは麻理のなか』では男女の彼岸に登場人物も、押見も、そして読者もつられて引き摺り込まれる。その結果、男性である押見が自身の中に「女」を見つけたというように、オナニーという行為が男女の彼岸に至るための契機として表象されるのだ。

このように『ぼくは麻理のなか』において、オナニーという行為は、はじめは小森（麻理）が抱く理想の少女麻理への一体化願望の結実として描かれていた。しかし、物語の終盤でそのような小森（麻理）は存在しないことが明らかになったことで、少女との一体化は不可能なものとして織り込み済みだったことがわかる。そして、実際のところ、オナニーは麻理が個としての解放を目指すための行為であり、最終的に男も女も同様に「汚くもきれいでもない」という男女の彼岸に至るのだ。

### 3.5. オナニーの限界

しかしながら、少女化願望を満たすための行為としてオナニーを捉えた場合、そこに問題が発生する。

---

<sup>54</sup> 同書、116頁

<sup>55</sup> 押見修造（2016）『ぼくは麻理のなか』第9巻、双葉社、191頁

当然ながら、少女になろうとする試みは失敗するものであることは、オナニーの限界のひとつである。『ぼくは麻理のなか』において、麻理との同一化を目指す小森（麻理）のオナニーは失敗に終わるのみならず、男女の彼岸に至ること、「向こう側」を知る少女という理想は否定された。実際に、押見は『ぼくは麻理のなか』のストーリーについて、少女になる話を描きたいというモチベーションがあった一方で、同時に、少女が「向こう側」を知っているという自身の願いは幻想であるという結論に行き着くことを意図していたという<sup>56</sup>。

オナニーとは、少女になろうとするものの、結局男性である自分に引き戻される行為であったが、男女の境目はないのだという『ぼくは麻理のなか』の結論は、男性に引き戻されるというオナニーの苦痛を乗り越えるものではある。しかし、「少女になりたい」という切実な願いは叶わない。つまり、結局のところ「向こう側」には到達できないのだ。

もうひとつの限界は、男女の彼岸へと至るプロセスを徹底できていないという限界であり、それは物語が「少女よって導かれる」という構造をとる以上、避けられないものである。つまり、自らを救ってくれる少女を待望している時点で、少女に対する理想化をやめることができていないという点である。押見は自身が少女に救われる物語を描いてきたことについて、以下のように言及する。

もしかしたら、僕はまだ男をやめられないのかもしれない(笑)。自分の中の男が、助けに来てくれる妄想の女の子を描かせているのかも<sup>57</sup>。

このように、少女に救われる話を描くことは、結局のところ男性的な願望から抜け出せていないことに押見は自覚的であった。

無論、『ぼくは麻理のなか』もこの例に漏れない。小森（麻理）にしても、男女の彼岸に行き着くために麻理やその身体、あるいは依という行動を共にする少女の存在は欠かせないものであったし、小森（本人）にしても、突然目の前に自分も小森であると騙る少女が現れたのであり、どちらにせよ少女の助けを必要とした。さらに、オナニーが独立のための効力を持ったのは、麻理とい

---

<sup>56</sup> 高橋、前掲書、117頁

<sup>57</sup> 宮川直実（2019）「特別対談 押見修造×ふみふみこ 「未来はない」と諦めた日から生きること」、くらげパンチ編集部ブログ、<https://kuragebunch.com/info/entry/aitonoroitaidan2>（2024年3月1日閲覧）。

う少女としてのものであった。

以上のように、オナニーの限界とは、目指していた「向こう側」に到達することはできない点と、「少女よって導かれる」という物語であるかぎり、少女に対する理想を捨てるというプロセスが徹底できない点である。

#### 4. オナニーから「男を降りる」へ — 『おかえりアリス』論

##### 4.1. 『おかえりアリス』という挑戦

本章では、『おかえりアリス』において、どのようにして少女化願望を叶える手段としてのオナニーが抱える限界を乗り越えようとしたのかを明らかにしていく。はじめに、押見にとって『おかえりアリス』を描くことはどのような挑戦であったのかを示す。

押見によると『おかえりアリス』は、「自分の中の『性欲』『男』を見つめ、向き合い、解体すること<sup>58</sup>」を目標に掲げて描かれ、さらに最終巻である第7巻のあとがきでは、執筆に至った経緯を以下のように詳しく述べている。

この漫画を描き始める何年も前から、私は、性にまつわる違和感や苦しさを形にしたい、漫画として表現したい、と思っていた。

6巻までのあとがきで書いてきたように、なぜか自分は男であることがうまくできない。女性と対するのが怖い。男性の輪の中にも、それが自分の居場所だと思えない。違和感を無くせない。セックスもうまくできない。というか、セックスしている自分と普段の自分（またはオナニーしている自分）との間に断絶を感じる。いや、オナニーしている自分も結局自分だとは思えない。頭の中と現実の身体とが、全然一致しない。常に疎外感を感じる。自分だけなのか。他の人もそうなのか<sup>59</sup>。

自分が男性であることの違和感と苦しみに悩んでいた押見であったが、森岡正博『感じない男』を読んだことが転機となり、森岡の欲望を可視化するような記述と、性について自らの身を削って欲望を言語化する書き振りに感銘を受け、

<sup>58</sup> 押見修造（2020）『おかえりアリス』第1巻、講談社、187頁

<sup>59</sup> 押見修造（2023b）『おかえりアリス』第7巻、講談社、170頁

『おかえりアリス』の物語を考え始めたという<sup>60</sup>。

僕も、自分なりの性の地獄めぐりをしないとイケない。性にまつわる個人的な問題を赤裸に描いて、その先でこの苦しみの正体を捕まえたい。そう考えて、物語を考え始めた<sup>61</sup>。

何度も性にまつわる個人的な問題を描いてきた押見であったが、『おかえりアリス』は男であることの違和感という押見の性に対する問題意識が、オナニーという行為を中心として先鋭化されている。それは物語の冒頭を見れば明らかであり、『おかえりアリス』の物語は、主人公の亀山洋平が同級生の男子室田慧にオナニーのやり方を教わり、精通するところから始まる（第1話）。そして高校生になり、女装した姿になって再び洋平の前に現れた慧は、「男を降りた」と自称し、「教えてあげるよ/オナニーよりすごいこと<sup>62</sup>」と洋平に告げ、舌を出して微笑むのだ（第2話）。

押見によると、洋平は押見の中にある無自覚な「男」の分身であり、慧は「男を逃れたい」と思う自分を投影したという<sup>63</sup>。ゆえに『おかえりアリス』は、洋平が慧に導かれ、ともに「オナニーよりもすごいこと」や「男を降りる」ことを目指す物語ということができる。

#### 4.2. 思春期の分岐点としての精通

まず、『おかえりアリス』の物語が、洋平が慧にオナニーのやり方を教わり、精通するところから始まることに注目したい。先んじて結論を言ってしまうと、これは少女になることがもう不可能である男になってしまった世界で、どのように男であることから解放されるのかという物語であることを端的に示している。そしてオナニーは基本的に男性であることや男性の身体に自身を閉じ込める行為として描かれるのだ。

ここで押見にとってオナニーとは何であったのかを振り返りたい。前述の通り、押見にとってオナニーとは、自らをべとべととして汚い男の身体の方へ

---

<sup>60</sup> 同書、170-171 頁

<sup>61</sup> 同書、171 頁

<sup>62</sup> 押見（2020）、92-93 頁

<sup>63</sup> 季刊エス編集部、前掲書、63 頁

と向かわせる行為であった。さらに押見は、中学一年生で精通して以降、押見は自分の身体を汚いと思い始めたと述べているが<sup>64</sup>、押見だけでなく、オナニーとはいくらかの男性にとって、自分の身体を男性的な汚い身体へと追い込む行為なのである。例えば、ぼくらの非モテ研究会（以下、非モテ研）を主催する西井開によると、非モテ研の中には、オナニーや男性の身体に対して嫌悪感を抱いている男性が少なからずいるという<sup>65</sup>。メンバーの鈴木は以下のように述べる。

マスターベーションをしているからホルモンバランスが崩れて……。詳しいことはわからないんですけど男性ホルモンのせいなのか。インターネットを見たらあるんですよ。そればかりはどこまで真実かわからないんですけど、でも実感としては、なんかあるんです。[中略]もともと毛深いのだったら受け入れられるんですけど、ストレスとかマスターベーションのせいで生えてきてるのであれば最悪やなって。そんななるくらいやったら（マスターベーションを）せえへんかったのに。結局自分がそれでしたからって言う……自己責任みたいな<sup>66</sup>。

このようにオナニーとは、実際はどうであれ、いくらかの男性にとっては自らの身体を汚くする行為であり、自分のせいで男になってしまったというスティグマを男性に植え付ける行為なのである。

森岡は「あの思春期の分岐点を、男性ホルモンも、筋肉も、体毛も、精液も存在しない『女の体』のほうへと向かって、大きくカーブしてみたかった<sup>67</sup>」というが、この「思春期の分岐点」として精通は想定できる。だからこそ洋平の精通から始める『おかえりアリス』は、精通し男性になってしまった世界で、どうすれば男性であることから抜け出せるのかという物語であるのだ。

#### 4.3. 2つの射精 — 「男を降りる」射精と男性としての射精

次に作中における射精の描写に注目して『おかえりアリス』を分析する。大

<sup>64</sup> 押見修造（2021）『おかえりアリス』第3巻、講談社、189頁

<sup>65</sup> ぼくらの非モテ研究会（2020）『モテないけど生きてます — 苦悩する男たちの当事者研究』青弓社、129頁

<sup>66</sup> 同書、127-128頁

<sup>67</sup> 森岡、前掲書、150頁

きく分けて、『おかえりアリス』には、2つの射精の描かれ方がある。ひとつは洋平が慧に導かれる場合であり、もうひとつは三谷結衣という少女に導かれる場合である。

三谷について簡単に触れておく。三谷は洋平と慧の幼なじみで、昔から慧に恋心を抱いており、中学生のとき、慧に告白する。しかし彼女は振られてしまい、直後、慧は転校してしまう。一方で、洋平は三谷に恋心を抱いており、中学生のとき偶然、その三谷が慧に告白しているところを目撃してしまい、以降気まずくなってしまっただけで三谷とは疎遠になる。しかし高校生になった洋平は心機一転し、三谷と付き合うことを目標に掲げるが、そこに「男を降りた」を自称し、女装した慧が現れるのだ。ゆえに洋平にとって慧は「男を降りる」道であり、三谷は異性愛規範に縛られた男という存在に引き戻される道なのである。

前者を分析するために、まずは洋平が慧に導かれる過程を整理したい。繰り返すことになるが、『おかえりアリス』は洋平の男性的な価値観が慧によって剥がれていく物語であった。実際に、洋平は当初男性であるのに少女の姿をして蠱惑的な言動をとる慧を受け入れることができなかったが、次第に慧を受け入れ、異性愛を前提とした男性的な価値観を変容させていく。そして慧とともに「男を降りる」筋道を探していくのだ。

洋平の価値観が変容する契機となったのが、第5話で再会パーティと称して洋平と慧と三谷の3人が慧の家に集まったシーンである。かつて慧のことを好きだった三谷は、少女の格好をしている慧の変貌ぶりに涙する。対して慧は自分（慧）の身体を触って確かめてみろと言ひ、そのまま三谷にキスをする。昔から三谷のことが好きだった洋平はこれに激怒したが、洋平に対しても慧は以下の台詞を言いつつキスをする。

怖いんだ/僕が三谷を汚しちゃうって/それが怖いの？/あの時も/今も/ふふ/  
どうして？/「男」として/許せないの？/そんなの/捨てちゃえ<sup>68</sup>

ここで慧は、洋平が三谷を神聖視して性的に潔白な存在として捉えていることを批判する。またこの時、キスをされた洋平は恍惚な表情を浮かべ、股間は膨らんでいたことも重要である。洋平は男性である慧に対して勃起したことを受け

---

<sup>68</sup> 押見（2020）、166-168頁

入れられず、妄想の中で慧を女性の身体に仕立て上げていた。この時はまだ慧を「女性」としてしか受け入れることができず、洋平が異性愛規範に縛られていることがわかる。

そして第9話で洋平の家に来訪した慧は、三谷とセックスするときの練習と称して洋平の全身を愛撫し、果てには洋平の性器を弄る。慧に導かれる射精は、全身が多幸福感に包まれるように描かれる。そして合間に慧が中学生時に洋平にオナニーを教えたときのシークエンスが挟まり、慧に教わったオナニーが上書きされるような演出がなされる。

一方で三谷に導かれる射精は、異性愛に囚われた虚しいものとして描かれる。洋平の自身に対する恋心を知った三谷は、慧に相手にされないことの腹いせのように洋平を誘惑し、洋平は罪悪感を抱えながらもそれに乗っかってしまう。押見はセックスを「『こちら側』に引き戻される行為<sup>69</sup>」と呼ぶが、三谷とのキスやセックスのとき、洋平は自身を男として追い込んでしまう（例えば、「俺は...前に進みたいんだ/男として.....!」<sup>70</sup> 「男だろ/ぶちこむんだよ/おい洋平<sup>71</sup>」など）。

だからこそ念願が叶ったはずの三谷とのセックスは洋平にとって苦しいだけのものであり、その射精は性器だけが快感を感じるという局所的な肉体の快楽であった。それは射精に至る寸前の洋平の内心の台詞からも伺える。

三谷：ん.../はっ/「あ」/「あん」/「あん」/「ん」/「あん」

洋平：ちんこが...ちんこだけが/お湯につかっているみたい/ああ...でそう/きもち...いい...../まるで...../まるで...../オナニーみたい<sup>72</sup>

「ちんこだけが/お湯につかっている」程度の快感として三谷とのセックスは描かれ、さらにここでオナニーもその程度の快感として否定的に言及される。なぜなら洋平のオナニーは男性に引き戻される行為であり、その点で三谷とのセックスと一致するからだ。

以上のように、「男を降りる」道である慧による射精は、全身が多幸福感で溢れ

<sup>69</sup> 季刊エス編集部、前掲書、65頁

<sup>70</sup> 押見（2021）、70頁

<sup>71</sup> 同書、148頁

<sup>72</sup> 押見修造（2022b）『おかえりアリス』第4巻、講談社、170-171頁

るような気持ちいいものとして描かれる一方で、男性であることを強いられる三谷による射精は性器だけの局所的な肉体的快感として描かれ、オナニーも同程度のものとして扱われる。

#### 4.4. 精通以前に回帰する「オナニーよりすごいこと」

『ぼくは麻理のなか』において、個としての解放のプロセスであったオナニーは、『おかえりアリス』では反対に、自身を男性として縛り付けるものへと後退した。しかし『おかえりアリス』では、作中で「オナニーよりすごいこと」と呼ばれる、オナニーとは別の可能性が示されている。

改めて整理すると、「オナニーよりすごいこと」とは、オナニーを洋平に教えた慧が、再び洋平にオナニーとは別の形で教え直す新たな可能性であった。『ぼくは麻理のなか』におけるオナニーには、個として独立し、解放されるための行為という側面と、男性に引き戻される別方向の側面があったが、『おかえりアリス』におけるオナニーは、単に男性に引き戻されるものとして否定的に描かれる。だとすれば、新たな解放の手段として「オナニーよりすごいこと」は規定できるのではないか。本節では、『おかえりアリス』において「オナニーよりすごいこと」とは一体何であり、それが少女になるためのオナニーの限界を乗り越えうるものなのかを検討する。

第18話で雨に濡れた洋平を自宅に招き入れた慧は、シャワーを浴びている洋平がいる浴室に入る。そして慧は以下の台詞を告げ、洋平にキスをする。

ごめんね洋ちゃん/僕のせいかな/洋ちゃんが苦しいのは/僕が洋ちゃんにオナニーを教えたから/それが...ずーっとめぐって/洋ちゃんを苦しめてるのかな.../せきにん...../とらせて/洋ちゃんを解き放ってあげたい/僕は...そのために戻ってきたんだ/オナニーよりすごいこと/教えるって言ったよね/それを...しようか今<sup>73</sup>

ここで慧がオナニーを教えることで洋平を男にして苦しめてしまったことの後悔を吐露し、男であることから解放する手段として「オナニーよりすごいこと」を実行しようとする。

---

<sup>73</sup> 同書、11-12頁



「オナニーよりすごいこと」ではまず、慧は「今は...洋ちゃんは男じゃないよ/女でもない<sup>74</sup>」とあって洋平の身体全体を愛撫する。最初は身悶えすることを恥ずかしいと感じていた洋平であったが、次第に快感に身を任せ、「きもちいい...!<sup>75</sup>」「からだ.../ぜんぶ...<sup>76</sup>」と快感を素直に口に出すようになる。そして場面は切り替わり、小学生時に慧と洋平がプールで遊んだときの様子が挿入される。そしてこれは精通以前のまだ二人とも男になっていない頃の記憶である。「オナニーよりすごいこと」とは、少女になることによってその快感を感じるのではなく、精通によって性別が分岐する以前に戻ろうとする行為とその快感である。

したがって、「オナニーよりすごいこと」では、少女になることによって「向こう側」に至ろうとするのではなく、性別という枠組みができる以前に立ち返ることで「向こう側」に至ろうとするのだ。このとき、少女やその身体を媒介することはないし、少女を理想化することもない。よって、これは少女になるためにオナニーの限界を乗り越えるものだといえる。

しかしながら、精通以前に戻ろうとする志向も、結局は少女を理想化することと同様に、性別未分化の状態に対する憧れとなってしまう、単に憧れの対象が変化しただけともいえる。「向こう側」を憧れの対象を設定している限り、ジレンマからは逃れられないのだ。実際に、作中において「オナニーよりすごいこと」を体験した後の洋平と慧は、性から解放はされることはなく、引き続き苦悩を抱える。例えば、洋平は自らの性器を鎖に例え、その鎖を断ち切ろうとして性器をカッターで傷つけるなど（第34話）、堂々巡りの末に男性性や男性身体に対する嫌悪を募らせていく。

#### 4.5. 自らのあり方をずらし続ける行為としての「男を降りる」

「オナニーよりすごいこと」には、性別未分化の状態を理想化してしまうことの問題があった。だからこそ『おかえりアリス』のクライマックスでは、「向こう側」をつくらない別のやり方が目指される。

第37話では、「あたらしい身体」を見つけるために洋平は慧の髪の毛を短く

---

<sup>74</sup> 同書、17頁

<sup>75</sup> 同書、21頁

<sup>76</sup> 同書、22頁

切る。それは洋平が夢の中で見た「男でも女でもない」姿を模していた。断髪という儀式を終えた第 38 話では、慧と洋平は手を繋ぎながら幽体離脱のようにお互いの身体から抜け出す。そして混ざり溶け合い、二人は身体をなくし、全てが渾然一体となった世界に辿り着く。

しかしそこにとどまることはできず、第 39 話でシルエットだけの存在になった二人は、「もういちど/僕らのからだをつくろう/はじめから/別のやりかたで/.....できるかな?/できるよ/たとえまた苦しくなっても/なんどでもつくろう/またここへ来てははじめから<sup>77</sup>」と、何度でも身体をともに作り直すことを宣言し、現実世界へと戻ってくる。押見はこの結末について以下のように述べる。

けれど、一つの答えとして得たのは、常に今いるここから降りようとし続ける、ということだ。「降りる先」は、瞬間ごとに変わる。どこかにゴールがあるわけではない。いつも、今いる場所を見つめて、「別のあり方」を求めること。誰かに幻想を押し付けて逃避したりせずに、あくまで自分自身から「降りる」こと<sup>78</sup>。

ここでは目指されるべき理想をひとつに決めてしまうのではなく、その都度、現時点とは違った「別のあり方」を求めるあり方が提示される。押見は「ずらす」という言葉を用いて以下のようにも説明する。

じゃあ、借り物ではない別の姿として何を選択するのか、という答えは漫画のどこかで出さないといけないとおもっていましたが。けれど無いんですよ、やっぱり。自分の結論としては無い。男の姿を借りるか女の姿を借りるか、それをずらすしか無いんです。そこから外れるものとしての LGBTQ のようなカテゴライズはあるんですけど、それも突き詰めていくと、ずらしや外し、否定であって、完全にオルタナティブな姿というのは発見できない。[中略] そうすると、完成形を出口として求めることがもう間違っていて、その都度、その瞬間ごと、ずらし続けるしかないのかも

---

<sup>77</sup> 押見 (2023b) 、108-111 頁

<sup>78</sup> 同書、174 頁

しれないという結論に至ったんですよ<sup>79</sup>。

つまり押見が『おかえりアリス』を通して示したことは、「向こう側」の否定である。少女や性別未分化の状態を「向こう側」であると決めつけ、そこに至ろうとするのではなく、今ある状態から絶えず自分をずらし続けるという営みである。最終回（第40話）で大人になった慧は、今度は髪を伸ばした状態で洋平の前に再び現れるが、これは完成形を決めない可変的なあり方を表しており、押見は「その都度、切ったり伸ばしたりすればよくて、要はどちらでもいいんじゃないか<sup>80</sup>」という。

さらに『おかえりアリス』は少女という他者によって導かれる物語ではなく、慧と洋平が手を取り合っただけに進む物語である。押見は慧と洋平の「二人は一人の人間の表裏<sup>81</sup>」と語っていることを踏まえると、少女による救済を拒む男性のセルフケアの物語として解釈することもできるだろう。実際に、押見は『おかえりアリス』において、男性主人公を救う役を担う少女を慧という男性にしたことで、そのような「ミューズ」を自分の中に取り込んでしまったという。

これまでは女の子という存在に他者性を仮託していたんですけど、『アリス』では慧ちゃんを男の子にしたことで自分の中に迎え入れてしまったので、もう他者ではなくなってしまった<sup>82</sup>。

押見にとって助けに来てくれる少女を待望することは、男をやめられていないことの証左であったが、『おかえりアリス』では、少女による救済を拒むことによって「男を降りる」のひとつの解を提示したのだ。

## 5. おわりに

本論文では、男性が抱く少女化願望とは一体何であるのかを探るために、そのような願望を作品に昇華している押見修造の漫画を研究対象とした。とりわ

---

<sup>79</sup> 季刊エス編集部、前掲書、64頁

<sup>80</sup> 同書、64頁

<sup>81</sup> 同書、63頁

<sup>82</sup> 同書、65頁

けオナニーの描写に注目し、オナニーと少女化願望の関係とその描かれ方を分析した。

そもそも男性が持つ少女化願望とは、単に男性性からの離脱にとどまらず、男性が少女の身体だけが感じられると信じている性的な快感を味わいたいという欲望だとする主張もある。ゆえにいくらかの男性にとって、オナニーとは自分の本来の姿である少女になりきってその快感を知ろうとする行為であったが、一方で、男性であることに引き戻される逆方向の力も働いていた。同様に、押見は自身にとってもオナニーとはそのような行為であると語っている。

実際に、押見の作品においてもオナニーとはそのような行為として描かれた。『ぼくは麻理のなか』において、オナニーという行為は、最初は「女の快感」を味わうために少女と一体化したいという男性の欲望として描かれる。しかし、それは幻想として否定され、むしろ自らを縛り付けるものから独立することと、異性に対する理想を手放し男女の境界線をなくすための行為として描かれた。しかしながら、オナニーには、結局のところ少女になることはできないという点と、「少女よって導かれる」という構造をとる以上、少女に対する理想を捨てるというプロセスが徹底できない点で限界があった。

より押見が抱える性の苦しみを掘り下げた作品である『おかえりアリス』では、この限界を乗り越える方法が模索された。それは主人公の洋平を導く慧が少女ではなく、あくまで「男を降りた」男性であることからわかる。さらに本作の特徴は、オナニーの負の側面、つまり男という存在に縛り付けられる男性の苦しみが克明に描かれることである。象徴的なのが射精のシーンであり、男であることに固執する限りセックスであれオナニーであれ、それは局所的な快感ではない虚しいものとして描かれた。一方で、作中では、男であることから解放される行為は「オナニーよりすごいこと」と呼ばれ、それは少女になることではなく、精通前の性別が未分化であった頃に回帰することであった。これは一見、少女に対する理想を捨てているという点で、オナニーの限界を乗り越えるものであるが、特定のあり方を理想としてしまう以上、同様の苦しみを抱え続けるものであった。そうではなく、最終的に、常に現状から変化し続けようとする可変的な男性のあり方が示された。

しかしながら、押見が示した結論は、公的に拮抗することを拒み、むしろ私的領域に留まることを是としているという批判は可能だろう。オナニーとはその

性質からして私的領域に閉じこもる行為であるし、『おかえりアリス』の結論でさえ、「きみとぼく」という二者間の関係から抜け出していないともいえる。このような批判を受けることは、自身にとっての切実な問題をテーマにする押見という漫画家の宿命なのかもしれない。しかし、私的な世界を書き続けることで読者に幅広く支持されてきたこともまた事実である。

また、本論文の反省点として、女性キャラクター側からの視点が少なかったことも挙げられる。男性が抱く少女化願望を分析することを目的にしたため、女性の視点が少なくなってしまう。本論文では十分な吟味ができなかったが、押見作品では女性キャラクターの心情にも焦点を当てた作品が多く、さらなる読解の可能性に開かれている。

以上のような反省点は見られるものの、実際、本論文の冒頭で掲げた「男性危機」に限らず、ジェンダーのゆらぎと問い直しが進行している現在の状況を鑑みると、押見という漫画家の重要性は今後いっそう増すだろうし、押見の豊穡な作品群はまだまだ多様な解釈の可能性が残されている。拙論が新たな研究の足がかりになれば幸いである。

## 文献一覧

### 書籍

会田誠（2022）『性と芸術』幻冬社

赤川学（1996）『性への自由／性からの自由 — ポルノグラフィの歴史社会学』青弓社

ぼくらの非モテ研究会（2020）『モテないけど生きてます — 苦悩する男たちの当事者研究』青弓社

藤本エリ（2014）「漫画家・押見修造インタビュー「『スイートプールサイド』も『悪の華』も僕にとっては真っ当な青春」」、ガジェット通信、<https://getnews.jp/archives/598227>（2024年3月1日閲覧）。

樋口康一郎（2015）「「女の子になりたい男」の近代 — 異性愛制度のなかの〈男の娘〉表象」『現代思想』第47巻、第13号、青土社、85-92頁。

伊藤公雄・多賀太・大東貢生・大山治彦（2022）『男性危機? — 国際社会の

『男性政策に学ぶ』晃洋書房

金澤ひかり (2019) 「漫画家の押見修造さん 強みになった「引きずっている思春期」」、withnews、

<https://withnews.jp/article/f0190813000qq0000000000000000W07n10101qq000019545A> (2024年3月1日閲覧) )。

加山竜司 (2018) 「【インタビュー】押見修造『血の轍』 「これを描いたら引退してもいい」!? 読者に衝撃をあたえた、あのシーンの秘話も!?!」、このマンガがすごい! WEB、1頁、<https://konomanga.jp/interview/138104-2/> (2024年2月29日閲覧)。

季刊エス編集部 (2024) 「漫画『血の轍』『おかえりアリス』押見修造」『季刊エス』第84号、パイインターナショナル、58-65頁。

熊田一雄 (2005) 『男らしさという病? — ポップカルチャーの新・男性学』風媒社、80-84頁

マガポケベース (2023) 「【第110回新人漫画賞締め切り直前特別企画】～漫画家を目指すキミに贈る～漫画家への花道 『おかえりアリス』押見修造先生が新人漫画家の悩みを解決!」、マガポケ、

[https://pocket.shonenmagazine.com/article/entry/hanamiti\\_20230329](https://pocket.shonenmagazine.com/article/entry/hanamiti_20230329) (2024年2月29日閲覧)。

宮川直実 (2019) 「特別対談 押見修造×ふみふみこ 「未来はない」と諦めた日から生きること」、くらげパンチ編集部ブログ、

<https://kuragebunch.com/info/entry/aitonoroitaidan2> (2024年3月1日閲覧)。

森岡正博 (2013) 『決定版 感じない男』筑摩書房 (初版2005年)

永山薫 (2003) 「セクシュアリティの変容」、東浩紀編『網状言論F改』青土社、39-57頁。

永山薫 (2006) 『エロマンガ・スタディーズ — 「快樂装置」としての漫画入門』イースト・プレス

斎藤環 (2003) 「「萌え」の象徴的身分」、東浩紀編『網状言論F改 — ポストモダン・オタク・セクシュアリティ』青土社、59-81頁。

ササキバラ・ゴウ (2004) 『〈美少女〉の現代史 — 「萌え」とキャラクター』講談社

高橋祐美 (2016) 「INTERVIEW『悪の華』、『ぼくは麻理のなか』、『ハピ

ネス』漫画家押見修造」『Trickster Age (ロマンアルバム)』第32号、徳間書店、117-121頁。

若林理央 (2021) 「「血の轍」押見修造さんインタビュー 思春期の母子関係の悩み、ぜんぶ出す覚悟で」好書好日、<https://book.asahi.com/article/14487978> (2024年2月29日閲覧)。

## 漫画

押見修造『アバンギャルド夢子』講談社、全1巻、2003年

押見修造『デビルエクスタシー』講談社、全4巻、2005年～2006年

押見修造『漂流ネットカフェ』双葉社、全7巻、2009年～2011年

押見修造『悪の華』講談社、全11巻、2010年～2014年

押見修造『スイートプールサイド』講談社、全1巻、2011年

押見修造『ぼくは麻理のなか』双葉社、全9巻、2012年～2016年

押見修造『志乃ちゃんは自分の名前が言えない』太田出版、全1巻、2013年

押見修造『血の轍』小学館、全17巻、2017年～2023年

押見修造『日下部さん』双葉社、2020年

押見修造『おかえりアリス』講談社、全7巻、2020年～2023年